

尿検査機械導入による TAT の改善について

AU4050、BC・ROBO6、UA・ROBO-2000

◎横井 美咲¹⁾、浅井 千春¹⁾、久野 臨¹⁾、岩田 理美¹⁾
社会医療法人 宏潤会 大同病院¹⁾

【目的】当院ではこれまで半自動尿分析装置オーションイレブン AE-4020（アークレイ製）で定性検査を行い、沈渣のあるものは検体を手作業でスピッツに分取、遠心、鏡検していた。しかし、繁忙時は作業負担が大きく、また検体取り違いなどの問題もあった。そこで2015年3月にスピッツへのラベル貼りを行う卓上型採血管準備装置 BC・ROBO6（テクノメディカ製）と全自動尿分析装置オーションハイブリット AU-4050（アークレイ製）を導入した。さらに2016年3月に全自動尿分取装置 UA・ROBO-2000 を導入した。これらの機械導入による効果を TAT（検体が到着してから結果が出るまでの所要時間）の変化で調査したので報告する。

【方法】3つの機械導入によって尿沈渣検査の流れが変わったことで TAT がどのくらい変化したのかを比較した。期間はそれぞれの機械を使用した場合において、2014年、2015年、2016年の6月～11月の半年間、繁忙時である AM8:30～AM10:30 の120分間に到着した緊急検体を対象とした。

【結果】AM8:30～AM10:30 の120分間に到着した緊急検体数は一日平均約150検体ほどであり、どの月もあまり変化は見られなかった。一方で TAT は AE-4020 使用時の2014年6～11月は平均33.1分だった。BC・ROBO6 と AU-4050 導入後の2015年は平均15.1分、UA・ROBO-2000 導入後の2016年は平均14.0分になり、TAT が短縮したことが分かった。

【考察】検体数に大きな変化はなく、検査を行う人員数も変化していないことから、機械導入により TAT が短くなったと考えられる。特に BC・ROBO6 と AU-4050 導入後に TAT が約17分短縮したことから、これらの機械導入は大変有用であった。また、機械導入により、バーコード読み取りから尿分取、分析の行程が自動でできるため、他の作業を行える時間が増えた。そして、自動分取により分取する際の検体取り違いがなくなり、自動分析によるスクリーニングで本来鏡検すべき検体に時間をかけられるようになった。

連絡先：052-611-6261